

# 横田英史の 書籍紹介コーナー



## 実践 フィジカルAIの教科書 ～現実世界へ歩み出すAIの技術と活用事例～

株式会社日立製作所 AI CoE  
新潮社 3,520円(税込)

いまやメディアで目にしない日はない「フィジカルAI」。本書は、基本概念から要素技術、適用事例、今後の展望までを網羅する。文章は構造化され、豊富な図や写真、表を効果的に使っており理解しやすい。倫理面の問題に言及していないのは残念だが、入門書・教科書として手元に置く価値はある。

本書は4章から成る。「フィジカルAIとは？」から「フィジカルAIの基盤技術とアーキテクチャ」「産業分野に見るフィジカルAIの活用事例」「今後の展望」へと展開する。基盤技術としてロボット基盤モデル、世界基盤モデル、デジタルツインを取り上げる。製造業、物流、自動車、鉄道、電力など事例も豊富だ。

## ヒトとAI

岡野原大輔  
岩波書店 1,034円(税込)

AIを人間社会に組み込む際に、ヒトはどのように自己を再定義し、社会の制度や規範を再設計すべきかを論じた書。「AI前提の世界」の見取り図を描き、どこを人間が担い、どこをAIに委ねるかを明らかにする。議論は構造化されており読みやすく、頭の整理に役立つ。

筆者は「AI前提の社会が到来するとき、誰が判断をし、誰が責任を負い、誰が

行為の主体となるのか。制度・規範・アーキテクチャをどのように再設計すべきなのか」と問い、考察する。そして人間の役割は「AIに対して目的と制約を設定し、AIの出す結果の不確実性を見極め、最終的な判断を自らの選択として引き受けることになる」と結論づける。

**超知能AIをつくれば人類は絶滅する**  
エリーザ・コードコウスキー、ネイト・ソアレス、  
櫻井祐子・訳  
早川書房 2,640円(税込)

人間をはるかに凌駕する超知能AIの誕生は阻止しなければならないと訴えた書。人類は存亡の危機に瀕しており、AIの挙動を人間の意図や価値観に適合させる仕組み(アライメント)の確立と、厳格なガバナンス体制の構築が急務だと説く。

多角的な視点から展開される「AI脅威論」は鋭い。現行の開発手法の危うさを突くだけでなく、技術的甘美や功名心が研究者を無秩序な競争へと駆り立て、安全性を後回しにする企業を生む構図を告発する。AI開発に資する計算リソースを国際的な監視団が一元管理し、超知能AI開発への転用を阻むべきだと提言する。

**テクノロジカル・リパブリック**  
～国家、軍事力、テクノロジーの未来～  
アレクサンダー・C・カープ、ニコラス・W・ザムスカ、  
村井章子・訳  
日経BP 日本経済新聞出版 3,300円(税込)

米パランティア・テクノロジーズの共同創業者と幹部が、「テクノロジカル・リパブ

リック(科学技術立国)」の在り方を論じた書。テクノロジー企業は政府との関係を再構築し、国防や国家理念の実現に積極的に関与する義務があると強調する。

テクノロジーは社会を変革し、国家を変え、人類を前進させるために使うべきだと主張する。自由な民主社会が勝利を収めるためには、倫理的・人道的な正しさを訴えるだけでなく「ハードパワー」が不可欠であり、その源泉はソフトウェアから生じるという。現在のテクノロジー企業やシリコンバレーは、目先の利益追求や消費者向けプロダクトに偏重しすぎていると批判する。

## 不安の世代

～スマホ・SNSが子どもと若者の心を蝕む理由～  
ジョナサン・ハイト、西川由紀子・訳  
草思社 3,080円(税込)

社会心理学者が、スマホとSNSが子どもたちに与える悪影響についてデータに基づき警鐘を鳴らし、解決策を提示した書。スマホとSNSは、自由遊びや協調性を子どもから奪い、友人との非同期な交流に膨大な時間を費やすように仕向けた。

男女で影響に明確な差があるという。女子はショート動画と自分を比べて自己評価が低下し、不安や抑うつに苛まれる。一方、男子は現実社会での生きた経験が減少し、自信を持てずに無力感に苦しむ。著者は、学校でのスマホ禁止、高校生までスマホを与えない、16歳までSNSアカウントの作成禁止、そして自由遊びの拡充といった具体的な対策を提示する。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。  
川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグローヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロステック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役役に就任。2018年3月退任。  
2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DXパートナーズ アドバイザリーパートナー、2024年3月(株)観瀾舎を設立 代表取締役社長、現在に至る。  
記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

\*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係ありません。

